

明治民俗史

(1)

郷土史民俗編の資料とする為、先般町内のお年寄りの方に御集願願い、いろいろ昔の思い出を語っていただいた。

これは今から約六・七十年前の方城町民の生活の姿である。若い人々には想像もつきかねると云った面もあるが、しかし之は江戸幕府の下、各藩大名の甚しい圧政の封建制度下数百年間、このような苦しい農民達の生活は続けられてきたのである。

白石照生氏(追)

飯は麦が主体、島の多い所は粟めし、ソバが出来ればソバ飯をたいて食べるといふ生活をやった。大きな鍋で、麦一升も一升五合も、まずさきを開かす。そしてそれを水でザン／＼ネバのとれだけ洗って、中に米を入れていた。

米の中に麦を入れるのではなく、麦の中に米を入れてた。というふうじやった。

池水孫四郎氏(古門)

先づ食生活の面から入って行く司会

皆さんの子供の頃の食生活について話して聞かせて下さい。

(古老に聞く)

申島四郎氏(古門)

明治三十年頃でした。私方家族も多かったのですから、飯は麦二升に米二合一位入れていました。

一七として中の方に二合ほど入れた米を飯に供え、残ったのを小さい子に食べさせると、あとはもう米の飯は殆んどなかったです。そう、ちようど油のようにして食べました。

芦馬徳松氏(畑)

それで春はもう、うち中みなたんぼに行つて、セリとか、ナツバ類を集めてきてそうして一家は麦ばかり食べました。

芦馬徳松氏(畑)

畑が七・八十戸あるけれど、

て弁当に入れてくれよつた。所が、わし達もなかく貧乏でお弁当の白飯をもらい出さん。そんなものを、うちのものは麦の多いものを食うけど、弁当持て行きたさうんで、弁当持て行くことすいて学校に行きよつた。

おかずや梅づけにきまっちゃよつた。

白石七太郎氏(古門)

皆さんのお小さい頃は、ずいぶん食べ物に苦労されたようですが、田の七・八反も作つて、なお、米にんぎをされたのですか。

鈴木市平氏(新門)

その当時、年貢を取られて米などなかつた。昔は半分どころか、八分も年貢にとられよつた。五俵位しかとれん所から、四俵年貢を取られよつたから、一俵しか残らなかつた。それだから米飯を食おうて食う余裕はない。銭とりはなし。

町

史

編

集

こ

ぼ

れ

話

一荷持つて帰つた肥料を、一反に一荷やりきら上等じやつた。田が出来よつて出来られん。そうして大山の馬草をきつてそれを、こえてたてて肥料にやりよつた。

芦馬徳松氏(畑)

余裕がなかつた。ひどくお前は今のよう肥料がないからなア、反当りに四俵か五俵とれるといえはいい方じや。それに五俵に二俵出すちや、かりわけと云いよつたがなかりわけしたちやあんたみんなが喜びよつた。

たいがい五俵とつて三俵は年貢として扱ふ。よほどいい場合は二俵、悪くすりや一俵しか残らなかつた。そして暮しよつたきひひいさじや。

香月光義氏(追)

合は、迫は大体自作が多かつたから現在と余り変わりがない。

宝珠も大体同じである。耕作反別は大休七・八反位でなかつたかと思ふ。反収は今昔に比べてあまりすんでない。たいがい六俵位でなかつたかと思ふ。迫のたんぼは石付きと云うのは少かつた。たいがい三俵付き位であつたから、六俵位でんとくわいが悪い。三俵付というの、六俵とれるうちの三俵年貢を出す。従つて、いい所で六俵、ちよつと悪い所で五俵位の反収ではなかつたかと思ふ。

鈴木市平氏(新門)

話を食ふ物からたんぼの話になりました。耕作のことについては、あとでお聞きすることにしよう。ところで皆さんの子供の頃の衣服の思い出話を一つ。

香月光義氏(追)

高津悦次郎(畑)

そんならわしが話そうか。わしが十二の年じやつた。役場がひつくりかえつて、向いがいつとき役場になつちよつたときがある。

そのとき皆川さんが測量師をつつて来て、測量をはじめてなア、田川郡で一番のつきじやつた。親子三人づれの測量師じやつた。名前はハヤブサとか云いよつた。弟の方がおてかけをつつてきてなア、食ぶるばかりでいいいき、おなごしおいで食わしいチ云うてなア、そらア百姓仕事はしきせん、テエコトのものじやけん、いわ、食うて置いぢよつた。

そのおなごしが、こんえりのシャツをこしらえてくれた。そのじぶんまで、それは誰かそほんまの伝説である。

香月光義氏(追)

今の見六橋から香月店の前を通つて八幡様の前の道は昔は殿様が、おかごに乗つて通つていた旧道じやつた。

昔この道を通つて行橋から塩売りがきよつた。所がこのコトツン橋にかかると、スツテンドーすべて何回も塩を川に流してしまひよつた。

そこで塩売りが考えこんで、こしらえたか、どげか俺人がこしらえてくれた。

どこからか、よそから来たもんがこしらえてくれた。

「そうじやろ、それじやなから、こしらえきろうことがねえ」と云うてなア又もどつてからも、だいつたつてくれチ云うて来たと云うがなア、おなごぶりはよかつたか悪かつたかしらんけど、岩屋の彦治の弟、彦兵衛がな

香月光義氏(追)

アどげでこげでも、よめじよにくれと云うて、くるチ、こんチ、わしはそれをよお覚えちよる。

芦馬徳松氏(畑)

わしが青年時代、十五・六の頃じやつた。コンに裏にササをつけてなア、いぐらともいやア鉄砲袖とも云う。あれを作つてもうて、ひつかぶつてきてまわるこのうれしき。

司会 当時の学校行き子供は、服装は、どんなでしたか。

芦馬徳松氏(畑)

まあ、つぎのあたらん着物をきて行きよるものは殆んどなかつた。帽子は

かぶらん。あしなかをはいちよつた。それから運動会するとき、草履に云うてツノのねえのを作つてもらいよつた。それを、おらア運動会き、草履を作つてもうたうたか、おまは作つたのしんだも云うてたのしんだもあらたか、と云うことで、雪降りには全くハダッで学校に行きよつた。それから子供はあしなかにあどがけ、足のとにかけてクビツてぬけんようにしちよつた。

そうせにや、雪がはいればぬけてしまふ。足袋はこしらえてはきよつた。しかしわしは足袋を、はいたことがなかつた。(つづく)

香月光義氏(追)

なんとしても之はおかし、これには何か深いわけがあるにちがいない。」といふようなことでも思ひなやんでいると、或夜彼の枕元に、お観音さんがお姿を現わし語つて……

「私は、幼い頃から耳病を患ひ生涯この為非常に苦しんで死んで行つた。そこで……どうにかして自分と同じ耳病に苦しんで居る世の人を助けてあげたい、救いたいと思ふ……どうか俺を耳の観音さんとして祀つてくれ。」

という御指示があつた。そこで、そこでうたつたか、これはうたつてるわけには

香月光義氏(追)

いかにいふことから、早速近頃の人はかり、あすこに観音さんとしてお祀りしたのであるというこぢや。

今は立派な医者も多いが、わし達の子供の頃は、医者はなし、それにこの観音さんが耳病に靈願まことにあらたか、と云うことで、そここ遠方からのお参り客も多かつたものじや。

(畑 芦馬徳松氏談)

香月光義氏(追)

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

香月光義氏(追)

伏が、打続つ断食の苦行に疲勞困ぱい、焦すいしきつた姿で息もたえん、今わらば堂のある所まで、お祀りつきたはしたが、その間に、豊前筑前の街道をトキマにスズカケの道者達が、白衣の袂も軽く先達を先頭にして法螺貝を吹きながら昇天した。そこで土地の人が之をあわれみかなしんで遺骸をその跡に葬り供養したといふのが、我部堂のいわれのように聞いている。

我部堂といふ名前もその若い修行僧の名前がわらべとか云つた人だつたんで、その名からきたものじや。

香月光義氏(追)

このわらべ童さんが、百日咳など子供の病気に靈驗あり又子供の夜泣きもどまるといふ云いつたえきがあり、わしらの子供の頃は、お賽銭や米など持つて親につれられてよく参つたものです。

(大星 桑野繁治郎氏談)

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

香月光義氏(追)

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

香月光義氏(追)

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

香月光義氏(追)

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

香月光義氏(追)

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

香月光義氏(追)

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

香月光義氏(追)

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

香月光義氏(追)

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

お願い

方城の土地、人、神社、寺、お堂さん、事件(出来ごと)其他なんでも昔から伝わる史実、伝説、民話等を知つて居られる方は、役場の町誌係までお知らせ下さい。

香月光義氏(追)

我部堂

前(今)は廃坑になつたが、元の倉石坑の入口のすぐ右の道わきに、お祀りしていらる。

「この伝説には、いふ前に理解を容易ならしむる為彦山山伏の峯入に、沿道の産婦は、峰入の通る時、産後四十九日間は其の通路を横切らなかつたといふ程に地方でも之を神聖視していらる。

又峰入りに後戻りしないといふ不文律もあつたといふ。

峰入りの行事は、先達が同行し、宿新入を卒いて、写経、読経、護摩修法その他の修業をしていらる。其の通行は一坊の衆徒を卒いて山を治め、山岳宗教の一本山として守護不入の別世界を現出していた。

さてこの山伏は山谷の嶮を、加治所待して悪疾悪鬼を払ふ、国家の安寧と人民の安全を計り、其の生活は随つて野趣多く豪放であると共に、嚴肅さを持つていらる。

彼の本練上人一千日の臥行のように修行も大変修行であつた。

其の行の表われとして、山伏の入峰即ち峰入りがあつた。

峰入りは、毎年春、夏、秋の三回行われ、彦山の行者堂を出発点として、春と夏は筑前の宝満山に、秋は豊

香月光義氏(追)

</

